

『コレクシヨン 戦争と文学』

(集英社)「918 K33 I-1-21」

桃から生まれた桃太郎は鬼が島の征伐を思い立った。思い立った訳はなぜかというと、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだったせいである。

これは芥川龍之介の『桃太郎』です。皆さんが知ってる昔話の桃太郎とは少し様子が違うでしょう？

芥川の『桃太郎』は、『戦争と文学』というシリーズの第5巻に掲載されています。『戦争と文学』は、『戦争文学』を集めた計二十巻に及ぶシリーズです。桃太郎が鬼ヶ島にゆく場面を読めば、なぜ、これが『戦争文学』の中に入っているのか、その所以がわかると思います。

「戦争」や「平和」について考える場合、日本も参加した第二次大戦を念頭に置く人が多いかもしれませんが。そういう文脈ではたいがい「二度とこの戦争の悲劇を起こさないように……」というようなことが語られているのではないのでしょうか。

しかし、戦争は第二次大戦だけではありません。その後(今

も)様々に戦争に苦しんだ(でいる)人がいます。なのに、この現実について考える機会は少なくないですか？

「そんな勝手に……、送り返すとかそんなことってありえるんですか？」

勝手に？何を言ひ出すのか、向こうは国と法律を握っている手強い相手だというのに。

(「9・11変容する戦争」日本の難民認定の問題を扱った『サラム』シリル・ネザマフイ)

だが考えて見れば、スパイ・ブームになる前だって、同じ屋根の下にいる家族を完全に信用仕切っていた人間なんて、ひとりもいなかったのではないだろうか。いなかったに違いない。(中略)人間とはそういうものなのだ。

(冷戦の時代)『台所にいたスパイ』筒井康隆)

「戦争と文学」は様々なテーマで(「女性たちの戦争」「戦時下の青春」など)戦争をとらえ、そのテーマに沿った文学が集められています。物語としても短編で興味深い作品ばかりです。

北野高校の図書館に全巻あります。この夏、新たなアプローチで「戦争」について考えてみて

はいかがでしょうか。

カズオ イシグロ 著

『日の名残り』

(早川書房)「933 I2 2」

読書案内

旅をしているときに、ガンジス川を眺めていたり、スペインの台地を一人歩いたりしていると、いつも異なる時間がながれていることを楽しめるときがある。

いくつかの小説を読むむときにも同様の感覚を得ることがあり、カズオ・イシグロの『日の名残り』を読んだときには、作品全体に流れる上質な寂寥感ともいうような感覚が、ゆつたりと流れていく時間を楽しむことができた。

この作品は第二次大戦後のイギリスを舞台に、戦間期に貴族の館で執事として働いていた主人公が、旅の中でかつてのヨーロッパ貴族社会の華やかだった時期を回顧する物語である。

主人公は、ナチスの台頭による戦乱の危機を英仏独の上流階級の間での交渉によって回避しようとする貴族たちの活動を、貴族社会の最後の輝かしい日々

として回顧する。

しかし実際にはそのような貴族文化はすでに実体的な効力を失っていたのであり、(チェンバレン首相の対独宥和政策が失敗に終わったように)彼らの熱意や信念はナチスドイツを利しただけに終わった。このような実際の歴史的事実から目を背ける、主人公による貴族文化への懐古的な態度は、小説技法としての「信頼できない語り手」の効果を十分に発揮し、作品の味わい深さを形作っている。

映画化もされていて人気の作品だが、小説の文体がこの作品の価値を形成しているように思う。日々の社会の速度から離れて、遠い時代に思いを馳せる時間を、味わってもらいたい。

Eddie Jones 著

『ハードワーク 勝つためのマインド・セッティング』(講談社)

大学卒業の際、大学の野球部の監督から「いわゆる『ハードワーク』無くして個人の成長やチームの勝利はあり得ない」という言葉をいただきました。

その言葉は今の自分の支えであり、無意識のうちに心の中で繰

り返されている言葉です。ある時ふと本屋さんに立ち寄った際に、この本を偶然見つけ、自然と手に取ってしまいました。『ハードワーク』とは何なのか、自分が取り組んでいる『ハードワーク』は目標達成につながっているのか、著者の考える『ハードワーク』とは何なのか、タイトルから様々な疑問が生まれ、今後の『ハードワーク』の参考にしなければと思いつつ読みました。

ただその瞬間を一生懸命にこなすことが『ハードワーク』なのではない。勝つために、成功するために、何が必要なのか。それは、起り得るあらゆる状況を予想し、その一つ一つに対して対策を考え、頭の中で十分なシミュレーションをし、練習を何度も繰り返すことによって得ることができる、絶対的な自信である。その絶対的な自信を得るまでの過程こそが『ハードワーク』だと、この本を読んで自らの考えを整理することができました。

たとえ負けても、失敗しても、勝利や成功に向けて取り組んだ『ハードワーク』は非常に価値のあることで、必ず今後の人生の糧になる、そのようなこ

とを身に沁みて感じました。頑張っているのに上手くいかな  
い、何をすればよいのかわから  
ない、そんな人に読んでいただ  
きたいと思います。

さだまさし 著

『解夏』(幻冬舎)

知らなかったことを知ると、  
楽しくならないだろうか。後に  
忘れても知識を得た体験そのも  
のが私は楽しい。一方で自分の  
見識の狭さを思い知ってしまう  
ことがある。

さて、この短編小説はベーチ  
ェット病を患った青年が主人公  
である。潰瘍や発疹が口腔内や  
下腹部などにでき、失明に至る。  
しかしその症状は個人差が大き  
い。主人公は母や婚約者、友人  
たちに支えられ、ある寺で知り  
合った老僧にも見守られて、病  
と共に生きていく。時に感情の  
乱れを頭わにして嘆く。視力が  
衰える中で、一人で道に迷って  
良かったと思う心境が切ない  
（周囲に心配をかけずに済んだ  
からである）。そして近づく予  
感の中で、彼は遂に『解夏』を  
迎えた。出版は2002年。少し古い  
小説である。当時、映画化もさ

れている。

私は「疾病」という言葉を知ら  
ず、初めて見た時も『しつび  
よう』と読んでしまっ  
た。調べてみるとベー  
チェット病の他に330の  
疾病が難病に指定さ  
れ、医療費助成制度が  
ある。これを知らな  
かったら、私はどんな人間  
のままだっただろうか。

### 読 書 案 内

この世界には医療だ  
けではなく、科学技術、あるい  
は文学や歴史、芸術など、あら  
ゆる分野で満ちている。生徒の  
皆さんもきっかけはご自由に、  
偶然にでも任せて気まぐれに図  
書館で何かの本を手にとってみ  
よう。あふれるほどの出会いが  
皆さんを待ち構えています。

デーブル・カーネギー著 山口博訳

『人を動かす』(創元社)

学年があがるにつれ、部活の  
中で人の前に立ち、後輩に指示  
を出したり何かを教えたりする  
という機会が増え、それに戸惑  
っている人は少なくないだろ  
う。集団の中で生活していると  
そんな場面は少なからずあるは  
ずだ。本書には、そんな際にヒ

ントになることが含まれている  
かもしれない。

この本はいわゆる自己啓発  
書であり、今世にある自己啓発  
書の原点とも言われている。私  
が集団を動かすことにつまずい  
ている時に参考となった本であ  
る。

本の中で人を動かす3原則  
のひとつにこのようなものがあ  
る。“盗人にも五分の理を認め  
る”何事も初めから否定(批判)  
から入るのではなく、まずはそ  
の人の言っていることを認めよ  
う。ということである。人を動  
かす立場になると、人の欠点ば  
かりが見えてしまうことや粗探  
しをして注意をしようという考  
え方に偏りがちである。だが本  
書ではそうではなく良いところ  
を誉め、長所を伸ばすことを考  
えなさいという捉え方に当時、  
心の琴線に触れる感覚を受けた  
ことを覚えている。

本書は、このような適切な  
人間関係を築く上で大切な原理  
・原則を偉人や一般の人々を例  
に挙げながら説明されている。  
この原稿を執筆するにあたって  
もう一度本書を読んでみたが、  
読む際の気持ちのありか、心情  
等によってまた新しく発見のあ  
る本である。座右に置いてしば

しば手に取りたい本のうちのひ  
とつだ。



教育実習生  
「おすすめの本」

キース・デブリン 著

『興奮する数学―世界を沸かせ  
る7つの未解決問題』

科学が素晴らしく発達した時  
代であるが、数学の問題の中に  
は人類が未だ解けていない問題  
がある。その中でも特に有名な  
ものが、7つの「ミレニアム問  
題」だ。

今から遡ること17年前、西  
暦2000年に、クレイ数学研究所は  
パリにおいて今後100年の数学の  
方針を指針づけるため、7つの  
未解決問題を発表した。そして1  
問につき100万ドルの賞金を懸け  
た。

これら7つの問題は、トポロジ  
ーや整数論、素粒子物理学、暗  
号理論、コンピュータ科学、流  
体力学という数学の広い分野に  
関わっており、その解決は現代  
数学の流れを方向付ける重要な  
鍵になるとされている。  
そしてこの本は、その7つ  
の問題の背景から詳しく丁寧な  
解説があり、中学生レベルの数

学知識があれば十分に、これら  
の世界最高峰の数学問題がどん  
なものなのかを知ることができ  
る。高校数学を受験向きに勉強  
すると同時に、数学研究の最先  
端に触れてみるのもよいと思  
う。

住野よる 著

『君の臍臓をたべたい』[913  
S1001]

すごく衝撃的なタイトルです  
がそこに隠された想いと意味深  
さにとっても感動しました。  
主人公とクラスメイトの女の  
子とのやりとりは楽しく読めま  
す。が、楽しく読んでみると、  
ラストに意表をつかれます。

「君」になりたいと思いつつ  
主人公が、影響を受け変わって  
いく様子に涙も溢れました。  
明日があることが当たり前では  
なくなり、「一日一日を後悔な  
く生きよう」そう思わせてくれ  
る物語です。ぜひ読んでみてく  
ださい。



## <外国語から第二言語へ>

### 初めに

---

初めまして、図書館サポーターです。本日は、僕が今、図書館サポーターとして進めている、洋書普及キャンペーンの一環としてこの場をお借りしました。主に、洋書と縁の薄い人達に向けて書きました。ぜひ目を通してください。

### 方針

---

まず、洋書を読むことで皆さんが得られることについて述べます。それは、第二言語です。つまり、英語です。少し、この表現に違和感を抱くかもしれません。今、皆さんは英文を見た時、どのように思いますか。もしかすると、苦手に感じるのではないのでしょうか。そこで、まさに今この文章を読む感覚と比べてください。和文ならば、感覚など意識しないほどスラスラと読めるはずです。なぜなら、日本語が皆さんにとって外国語ではなく、第一言語だからです。僕が皆さんに身に着けてもらいたいのは、外国語としての英語ではなく、自然に使える第二言語としての英語です。

では、これを身に着けるために洋書をどのように使うべきなのか、そのプロセスの例を説明していきます。

### 三つのステップ

---

- まず初めに、洋書をよむことの習慣化に取り組んでください。はじめから、ハリーポッターのような分厚いものを読む必要はありません。チャレンジ精神は歓迎しますが、その方向を誤ると、挫折の原因となります。最初は、F0シリーズのレベル1～7から読み進めてみてください。いずれも、10分以内で読み終えることができます。そのため、就寝前の10分間、毎日一冊読んでください。目的は、習慣化することで、脳を英文に慣れさせることです。慣れるということは、苦手意識をなくすのに役立ちます。
- 次に、習慣化ができた人達に、多読、つまり量を重視して読む世界に飛び込んでもらいたいと思います。ここでは、特にオススメの本は示しません。図書館にある、厚みの薄い洋書をすべて読む勢いで臨んでください。誇張はしていません。このステップで重要なことは、とにかく、とにかく、読むことです。
- これが、ここで紹介する最後のステップです。ここでは、皆さんの成長を確認します。一度、自分が話の展開をきちんと理解し、次を予測できるか試してください。これは普段、和書を読むときに自然と誰も行っていることです。これができるということは、脳が英語を日本語と同じように自然に使える言語として受け入れていることを示します。

以上、三つのステップについて書きました。僕は、「ここで述べたのはあくまで一例です。」や、「効果には個人差があります。」などの、無責任なことはいけません。なぜなら、英語が言語である以上、量を積めば誰でも使いこなせるようになるからです。断言します、誰でも使いこなせるようになります。

---

このような機会を下さり、支援して下さった、図書館の先生に、感謝します。